芦田均日記

【編集】福永文夫（獨協大学教授）／下河辺元春

A5判上製・セット函入／総3240頁
揃定価（本体480000円+税）
※分売不可

1905–1945
全5巻

戦前、軍部が台頭し、
暗黒の時代へと突き進む日本を見つめながら、
芦田は何を思い、何を考え、何を書き残したのか。

岩波書店版『芦田均日記』（全7巻）は1944年から1959年までの全33冊分を収録。本資料集は1905年から1945年までの全38冊分（**未公開日記**）を収録。
なお1945年分のみ、一部が重複していることをご了承下さい。

柏書房

〒113-0033 東京都文京区本郷2-15-13 TEL.03-3830-1891（営業）FAX.03-3830-5337
E-mail:eigyo@kashiwashobo.co.jp URL:http://www.kashiwashobo.co.jp

各巻構成

第1巻　1905年～1911年
第2巻　1912年～1925年
第3巻　1926年～1936年
第4巻　1937年～1945年
第5巻　解説、主要人名録、芦田家系図、芦田均略年譜、芦田均関係資料一覧

お勧めします

近現代史研究者・政治史研究者・外交史研究者・メディア史研究者・大学・公共図書館

柏書房の本

侍従武官長 奈良武次日記・回顧録（全4巻）

波多野澄雄・黒澤文貴　編集代表
A5判総1696頁　揃定価（本体65,000円＋税）オンデマンド版

陸軍大将奈良武次の膨大な日記から、東宮武官長、侍従武官長時代の十余年を収録。皇太子訪欧への随行から張作霖爆殺事件、五・一五事件、満州事変勃発など、つねに昭和天皇の傍にあって記録された、現代史への画期的な証言。回顧録も収める。

内田康哉関係資料集成（全3巻）

小林道彦・高橋勝浩・奈良岡聰智・西田敏宏・森靖夫　編集
A5判総1858頁　揃定価（本体39,800円＋税）

陸奥宗光の薫陶を受けた内田は、英国公使館二等書記官、駐清公使、駐墺・米・露大使を歴任後、政治家の道へ。第二次西園寺公望、原敬、高橋是清、加藤友三郎、斎藤実内閣において外相を務めた内田が、対英米協調外交から焦土外交へと大転回した裏側を探る。

日本海軍士官総覧

【復刻版】海軍義済会員名簿・昭和十七年七月一日調
財団法人海軍義済会　編／戸高一成　監修
A5判1584頁　定価（本体32,000円＋税）

明治より昭和17年4月1日までに任官（候補生も可）した海軍士官1万9300人余（現役に転官した予備士官、二年現役士官を含み、予備士官、特務士官を含まない）を出身科・期別に収録した、日本海軍、軍事史研究の根本資料である。

注文書

書店名

芦田均日記
1905-1945 全5巻
揃定価（本体48,000円＋税）
※分売不可
ISBN978-4-7601-4064-0

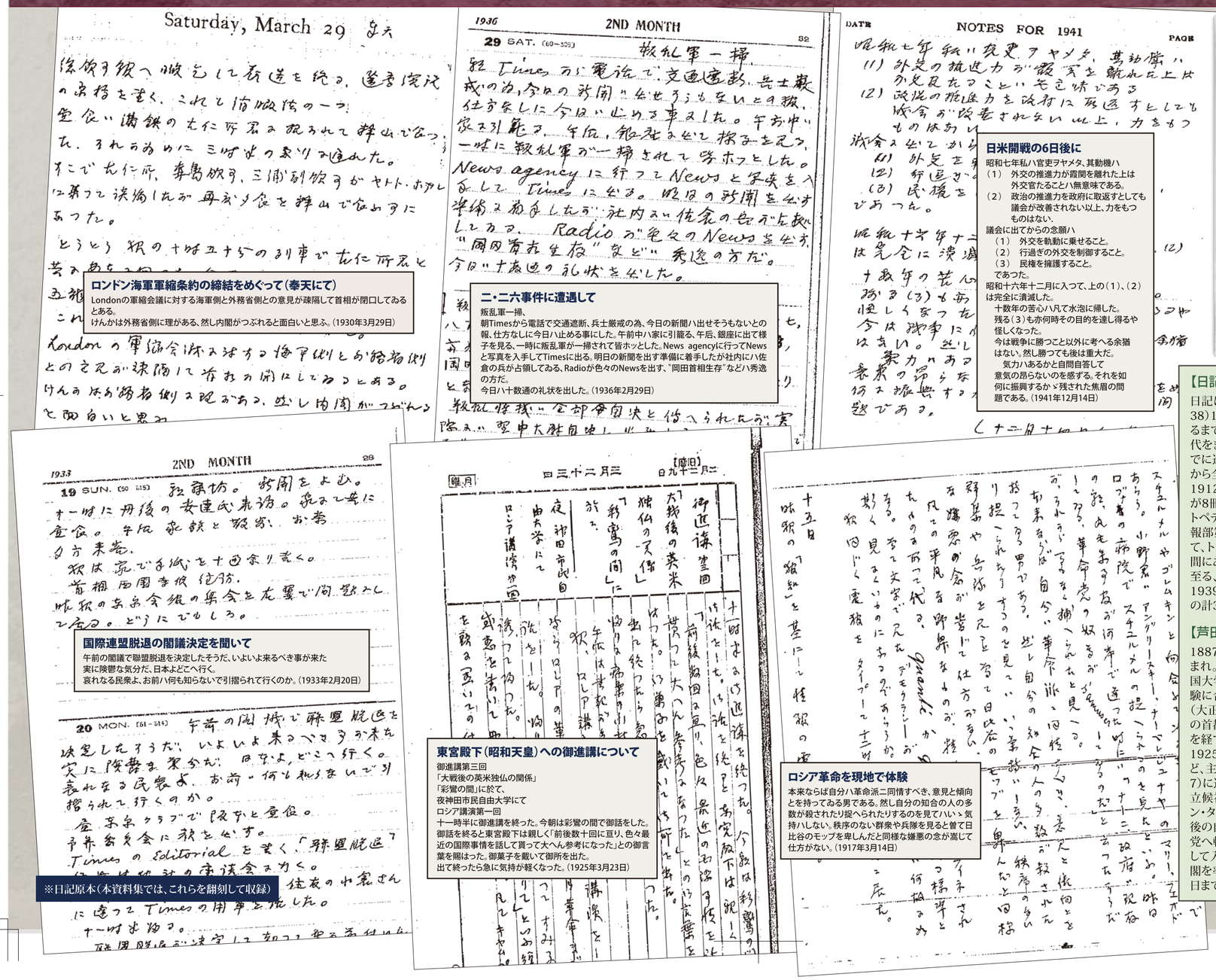
冊

お名前

ご住所・ご所属

取扱書店

戦前・戦中において、外交官、政党政治家、ジャーナリストとして確かな足跡を残した芦田の全38冊の未公開日記を鍵として、日本近現代史を読み解く!!



ロンドン海軍軍縮条約の締結をめぐって（奉天にて）

Londonの軍縮会議に対する海軍側と外務省側との意見が疎隔して首相が閉口してゐるとある。
けんかは外務省側に理がある、然し内閣がつぶれると面白いと思ふ。（1930年3月29日）

二・二六事件に遭遇して

叛乱軍一掃、
朝Timesから電話で交通遮断、兵士厳戒の為、今日の新聞ハ出せそうもないとの報、仕方なしに今日ハ止める事にした。午前中ハ家に引籠る、午后、銀座に出て様子を見る、一時に叛乱軍が一掃されて皆ホッとした。News agencyに行ってNewsと写真を入手してTimesに出る。明日の新聞を出す準備に着手したが社内に佐倉の兵が占領してゐる、Radioが色々のNewsを出す、"岡田首相生存"などハ秀逸の方だ。
今日ハ十数通の礼状を出した。（1936年2月29日）

国際連盟脱退の閣議決定を聞いて

午前の閣議で聯盟脱退を決定したそうだ、いよいよ来るべき事が来た
実に険呑な気分だ、日本よどこへ行く。
哀れなる民衆よ、お前ハ何も知らないで引摺られて行くのか。（1933年2月20日）

東宮殿下（昭和天皇）への御進講について

御進講第三回
「大戦後の英米独仏の関係」
「彩鸞の間」に於て、
夜神田市民自由大学にて
ロシア講演第一回
十一時半に御進講を終った。今朝は彩鸞の間で御話をした。
御話を終ると東宮殿下は親しく「前後数十回に亘り、色々最近の国際事情を話して貰って大へん参考になった」との御言葉を賜はった。御菓子を戴いて御所を出た。
出て終ったら急に気持が軽くなった。（1925年3月23日）

ロシア革命を現地で体験

本来ならば自分ハ革命派二同情すべき、意見と傾向とを持ってゐる男である。然し自分の知合の人の多数が殺されたり捉へられたりするのを見てハいゝ気持ハしない。秩序のない群衆や兵隊を見ると曾て日比谷のモップを卑しんだと同様な嫌悪の念が嵩じて仕方がない。（1917年3月14日）

日米開戦の6日後に

昭和七年私ハ官吏ヲヤメタ、其動機ハ
（1）　外交の推進力が霞関を離れた上は外交官たることハ無意味である。
（2）　政治の推進力を政府に取返すとしても議会が改善されない以上、力をもつものはない、
議会に出てからの念願ハ
（1）　外交を軌動に乗せること。
（2）　行過ぎの外交を制御すること。
（3）　民権を擁護すること。
であつた。
昭和十六年十二月に入つて、上の（1）、（2）は完全に潰滅した。
十数年の苦心ハ凡て水泡に帰した。
残る（3）も亦何時その目的を達し得るや怪しくなった。
今は戦争に勝つこと以外に考へる余猶はない。然し勝つても後は重大だ。
気力ハあるかと自問自答して
意気の昂らないのを感ずる、それを如何に振興するかゞ残された焦眉の問題である。（1941年12月14日）

【日記の概要】

日記は、芦田の第一高等学校入学の翌年1905年（明治38）1月から付け始められ、1959年（昭和34）6月に亡くなるまで、半世紀余の間綴られており、明治・大正・昭和の三代をまたぐ全71冊に及ぶ。戦後期の33冊については、すでに進藤榮一氏・下河辺元春氏の編纂によって岩波書店から全7巻が刊行されている。日記の内訳は、1905年から1912年7月に東京帝国大学を卒業するまでの明治期分が8冊。次いで1912年8月に外交官補に任じられ、サンクトペテルブルクからパリに至る在外勤務を終え、外務省情報部第二課長に転じた本省時代の大正期分が9冊。そして、トルコ、ベルギーで代理公使を務めた欧州勤務の7年間にあたる昭和初期と1932年に政界入りしてから敗戦に至る、政治家（ジャパン・タイムズ社長期［1933年1月～1939年12月］も含む）としての戦前・戦中期の分が21冊の計38冊（未公開）を、翻刻刊行する。

【芦田均略歴】

1887年（明治20）11月、京都府天田郡（現・福知山市）生まれ。1904年に第一高等学校へ入学。1907年に東京帝国大学仏法科へ進み、1911年に高等文官試験外交科試験に合格。翌1912年7月に東京帝国大学を卒業し、同年（大正元）8月に外交官補に任じられた。1915年にロシアの首都サンクトペテルブルクを皮切りに、4年間のパリ在勤を経て、1923年に本省へ戻り情報部第二課長を務めた。1925年から再びトルコ、ベルギーの代理公使を務めるなど、主に大陸畑の外交官としての道を歩む。1932年（昭和7）に退官するとともに、同年に政友会から衆議院総選挙に立候補して当選、戦前4期務めた。この間、芦田はジャパン・タイムズの社長を務め、ジャーナリストとしても活躍。戦後の自由党結成に際して中枢を占めたが、1947年に民主党へ転じて総裁となり、片山哲内閣では副総理格の外相として入閣。同内閣崩壊後の1948年3月、自ら首班として内閣を率いた（第47代内閣総理大臣。3月10日から10月15日まで）。1959年6月逝去。

※日記原本（本資料集では、これらを翻刻して収録）